

令和6年2月11日

<佐々木 朗>

令和5年度函館市自主防災リーダー養成研修（初級及び中・上級コースに参加して）

- 1 日時 令和6年2月8日（木）初級 2月9日（金）中・上級
- 2 場所 函館市民会館小ホール
- 3 主催 函館市
- 4 対象 初級～防災に関する知識や技能を身に付けたい方
中・上級～過去に研修を受講済みの方、防災士資格保有の方
- 5 講師 伊藤 友彦先生 函館市防災士会 道南ブロック代表
- 6 内容 初級 講義「地域の防災活動の推進に向けて」
演習「災害図上訓練（DIG）」
中・上級 講義「避難所について」
演習「避難所運営ゲーム（HUG）」

7 内容まとめと感想

(1)能登半島地震の現状

能登半島地震の現状として、避難所の準備不足、情報集約の難しさ、自身の備えの不足、自助・共助・控除の区分けと連携があげられている。実際は公的機関の関係者も被害者である。自助と公助は補い合わなければならない。よく「市役所は何をやっているんだ。」という声も上がるが、市役所は、一生懸命やっている現状も知っておく必要がある。一番難しいのは、上記に掲げた「連携」である。どうしても仕事のすみわけをしてしまう。そういう時は、普段から「顔の見

える関係」であるとうまくいくことがある。

また、善意の支援が被災地を圧迫する例もあった（古着、期限切れ食品、一方的な送り付け）。

避難所は、阪神淡路大震災をきっかけにだいぶ工夫されてきていた。新潟中部地震の避難所と比べるとその差は大きい。阪神淡路大震災が、大きな体育館にビニールシートを広げただけだったのに対して、新潟中部地震の避難所は、段ボールでの敷居があり、プライバシーが保たれてきた。また、女性用の更衣室、授乳所なども用意された。ところが、今回

の能登半島の地震ではそれが、生かされておらず、もとに戻ってしまっていた避難所も多かったということである。

(2)今、避難所として、とても大切なことの一つは、女性視点の防災・避難所運営である。更衣、授乳、安心した休息、トイレなどは女性視点が必要である。運営スタッフには女性を入れることが大切である。また、特にトイレは大切である。飲まず、食わずは、我慢できてもトイレはがまんできない。そのくらい大切である。



(3) スフィア基準

初めて聞いた言葉である。日本語にすると「人道憲章と人道支援における最低基準」と言い、災害や紛争の影響を受けてしまった方に対する最低基準のことである。

避難所ではとりあえず、命は守られる。しかし、避難所での生活が原因として、亡くなっている人の数も相当に多い。あるデータでは災害そのものの4倍の方が、いわゆる「災害関連死」となっていることが調べて分かった。避難所で人間として、生きていく最低限の基準が示されています。例えば

- ・一人当たりのスペースは、最低 3.5 m² を確保すること。3.5 m² は、だいたい畳2枚分ぐらいのスペースです。

- ・トイレは、20人に1つの割合で設置する。また、女性と男性の割合は1：3とする。

がまんは当たり前という意識を変えていく必要がある。それをかなえるためには、十分な備えやシミュレーション、そして、訓練が求められる。

「トイレには大便とトイレトペーパーが積み重なっていた。」「夜になると男の人が毛布の中に入ってくる。」(防災新聞より)なども過去の避難所の現実もあった。

(4) 函館市でどんな災害が発生したか・発生するか

- ・地震～函館群発地震・1968年十勝沖地震（私が小2、学校から避難したのを覚えている。函館大学が真ん中から崩れたのもこの目で見た）

- ・津波～1960年、2011年

- ・大雨・洪水（内水含む）～2022年8月の大雨（仕事で湯川の川の氾濫による泥の方付けをした）

- ・雪害～1983年に一日60cmの積雪記録がある。

- ・土砂災害、高潮・高波～平成2年11月4日、5日による大雨による災害（南茅部）

- ・火山～駒ヶ岳・恵山

- ・台風・竜巻～1954年洞爺丸台風

どうしても災害というと「津波」が真っ先に頭に思い浮かぶ。市街地は海拔が低いので、津波に対しての備えは必要である。その一方、「高いところに住んでいるから大丈夫。」ではなく、様々な災害が発生することをしておくことが大切である。



函館市の地域特性として、①砂州の上にてきた市街地（液状化現象、低地）、②段丘面に位置する住宅地（盛り土）、③海岸沿いの急傾斜地（土砂災害）、④火山地域、⑤河川、⑥場所を問わず、（内水氾濫、雪害、竜巻など）

※内水～市街地に短時間で局地的な大雨が降った場合、下水道や排水路が水を処理できなくなり、土地や建物に浸水すること。

(5)自分自身で備えておくこと

- ・耐震補強～まずは自宅を確認（2000年に大きく建築基準法が改定、増築などをしていないかなどもチェック）
- ・災害備蓄品～3日間生き延びることができるか
- ・避難場所の確保～必ずしも避難所とは限らない。
- ・避難路の確保～どこを逃げるか。
- ・避難開始のきっかけ～何があったら避難するか

(6)減災グッズ基本編のみ（人と防災未来センター）

- ・非常持ち出し袋、飲料水、携帯食、非常食、ヘルメット・防災頭巾・防止、ホイッスル、手袋、運動靴、懐中電灯、万能ナイフ、ロープ、携帯ラジオ、携帯電

話、連絡メモ、身分証明書（コピー）、筆記用具、油性マジック、現金（10円硬貨）、救急用品、毛抜き、持病薬、マスク、簡易トイレ、ティッシュペーパー、トイレットペーパー、ウェットティッシュ、使い捨てカイロ、サバイバルブランケット、ハンカチ・手ぬぐい、タオル、安全ピン、ポリ袋、ビニールシート、ライター、布ガムテープ

このほかに、個別に、貴重品、女性、高齢者、乳幼児、障がい者・外国人、ペットなどがある。

また備蓄しておくべきものとして、衣類、毛布、雨具、保存食、塩・調味料、食器、ラップ、アルミホイル、缶切り、カセットコンロ、鍋、歯磨き、石鹸、ドライシャンプー、重曹、風呂敷、予備電池、工具、地図、新聞紙、段ボール、ローソク、給水袋、キッチンペーパー、ホワイトボード、さらしの布、スリッパ、蚊取り線香等が挙げられている。

(7)事前避難行動計画（マイ・タイムライン）

地震、火山、竜巻などは突発的で、準備がしようがないが、大雨・洪水などは、ある程度事前に予測することが可能である。したがって必要に応じて早めの避難がかのうである。その計画が「マイ・タイムライン」である。

私のかつて勤務していた今金町種川地区は、道南唯一の一級河川が、地区内を流れており、氾濫に備えて、マイ・タイムラインが策定されている。高齢者が多い地域であるが、誰が誰を連れていくかも明確にされているとのことで、モデルケースとなっている。もともと、住民同

士の結束が固い地域であったのもそのような動きが取れて要因であると思う。

(8) 地区防災計画

地方自治体は、件の種川のような細部の計画までは立てることができない。また、常に見直しも求められる。平成26年4月に始まった地区防備計画制度では、地区住民などが地区防災計画（素案）を作成し、市町村地域防災計画に地区防災計画を定めるよう市町村に提案できるようになった。

ではどれだけ進んでいるかという、現状としては進んでいるとは言えない。届けられている計画は、北海道では札幌市が5地区、根室市が12地区、斜里町が1地区のみとなっている。

計画を立てることも大切であるが、その過程で、地区の現状を知り、様々な角度から災害について学び、また最大のメリットとして、地区住民が顔を合わせて話し合いができるということに尽きると考える。

(9) 避難所運営ゲーム北海道版（DOはぐ）



真冬に直下型地震が発生しガスなどが使えないという想定にしたがって、カードに示された条件をグループで話し合っ

ていく防災教育カードゲーム。このゲームは、静岡県が開発した避難所運営ゲーム（HUG）にほっかいどうの積雪寒冷の厳しい気象面や東日本大震災の経験などの視点を加え、道民の方々に避難所生活や避難所運営を自分事としてとらえ、地域の防災対策の課題をつかみやすくすることを目的に、静岡県の使用許諾を得て、北海道が作成したものである。

想定としては、2月の極寒の日曜日に、地震が起こり、電気、ガスはストップしてしまった。人々は、避難所（五稜郭中学校を想定）に次々と集まってくる。避難所であるため、ストーブ、照明、段ボールベッド、テント、発発など程度の備えはある。

6人の参加者に加え、防災士2名がアドバイザーとして入ってくれた。避難所に来る方たちをどこに案内するか、どう対応していくかを話し合った。

親子で避難してくる。学校は教室もあるので、うまく、教室に入れていく。また、体育館もテントの場所、段ボールベッドの場所、そして通路の確保、荷物置き場、掲示板などの配置をしなければならない。駐車場も優先順位を付けて確保しなければならない。名簿も必要。高齢者が来る。階段に配慮する。高齢者と子どもが来る。うるさくないようにという配慮も考える。認知症の方が来る、赤ちゃん連れが来る。車いすの方が来る。具合の悪い方が来る、インフルエンザと思われる高熱の方が来る。隔離することも考えなければならない。人工透析をしている方が来る。大きな犬を連れてきた人、猫を連れてきた人、モルモットを連

れてくる人、動物はどこまでいいのか。そういう間に、トイレが汚いという苦情が入り、寒くて耐えられないと言われ、どうして差をつけられるのかと言われ、食べ物だけほしいという方もやってくる。災害対策本部から、ほしいものをまとめるように言われる。頭はほぼパニック状態に陥る。

自分は公立学校の管理職をやっている、ある程度の危機管理はできると思っ



ていたが、その自信が根こそぎ、崩れた感じであった。運営する側も初めて、そして逃げてくる方も初めてであろう。そういう中で、リーダーシップを執っていくためには、よほど、訓練をしておかなければならないことが身に染みて分かった。

現時点の私の思いであるが、避難所になることが予想される施設は、あらかじめ、どこにどんな人を入れるか、事前に考えておく。特に体育館は、どこにトイ

レを置き、通路をどうするか、テントやベッドはどのような方に優先するのか、また、女性の着替えやプライバシーはどのように守るか、など、平時から、計画を立て、一年に一度や二度は、実際に避難所を設営する訓練が絶対必要であると思った。「いざとなればなんとかなる。」は通じないことが身に染みて分かった。

また、地域でも、「ここは津波が来ないから、特に心配などいらない。計画などはいらない。」ということではなく、常に「災害はいつどのような形で発生するかわからない。」ということを入れておきたい。また、地域住民がお互い助け合いができるよう地域ぐるみでの防災学習、研修、訓練が必要であることを知った。

(10)通信の確保

通信の問題も頭から離れなかった。電気が止まった場合、平成30年の北海道胆振東部地震のブラックアウトでは、携帯電話の基地局は1日か一日半ほどで機能しなくなった。その場合、中継局がなくてもでき、かんたんな免許さえ持っていれば活用できるアマチュア無線というものをもう一度見直すことも大切ではないかと思った。

アマチュア無線は、ハンディタイプの無線機でも、数キロは通信できるし、基地局がアンテナを上げていると、その数倍、から十倍以上の距離の通信ができる。また、消防、警察、自治体をまたいだ通信手段も担うことができる。

さらに、函館には、戸井地区に広域レピータがあり、函館、北斗市、七飯の平地を全てカバーすることができる。ハン

ディ機でも中継局を通して、全てに情報を発信し、また、受信することができる。このレピータは太陽光を電源としているため、停電時でも機能し、災害時には、貴重な通信手段の一翼を担うものである。

近年、アマチュア無線の社会的役割が見直され、災害時などの活用も認められるようになった。

災害になった時に、市民を守る側になることが予想される職種の方、また、自治会、町内会、各種のリーダーなどにはぜひ進めたい資格であることも、強く感じた。

(写真協力 防災士 松平真一さん)

令和6年2月12日執筆

佐々木 朗